

日中における授業中の筆記方略の違いとその背景要因 —高校生を対象としたインタビュー調査より—

劉 夢思 (東京大学大学院)

キーワード：筆記方略，比較研究，インタビュー

問題と目的

授業中の学習を促す活動でもあるノートテーキングの重要性が指摘されてきた (e.g., Christopoulos et al., 1987)。しかし、実際の学習場面では全ての学習者がノートを活用できているわけではない。例えば、大学生でも提示された情報を逐語的に写すことにより、かえって学習が損なわれてしまう可能性が指摘されている (Mueller & Oppenheimer, 2014)。従来、ノートテーキングは知識の記録と保存がその主な役割として捉えられてきたが、能動的に理解構築の活動とも捉えられる。そこで本研究では、作成したノートをその後どのように活用するのかという側面や、教科書への書き込みなども含めたより広い活動として捉え直し、「筆記方略」と呼ぶこととする。

授業中の筆記方略の利用に関しては、東アジアの中で同等に学力が高いと言われている日本と中国で違いが見られる可能性がある。そこで本研究では、日中高校生を対象にインタビューを行い、両国における授業中の筆記方略の利用の違いや、それを生み出す理由についても明らかにする。

方 法

調査対象者 日本における高校1,2年生10名(男性1名,女性9名),中国における高校1,2年生10名(男性6名,女性4名)。

手続き 1人あたり30分程度の半構造化面接を実施した。面接の内容はICレコーダーで録音し、後日筆者が書き起こした上で分析を行った。

調査項目 当日持参してもらったノートや教科書などを題材としながら、「普段の数学授業では、あなたはどのような筆記方略をするのか」、「なぜこのような行動を取るのか」等の質問を行った。

分析の枠組み 普段の授業で行っている筆記方略の実態やその背景にある認識について解釈し、また日中比較を通じてそれぞれの特徴や傾向を明らかにするため、日中高校生から得られたデータに別々にトランスクリプトを読み込み、その場での発話内容や語り手の認知的枠組みを読み取ることを目指して、能智(2011)を参考に分析を行った。

結 果

授業中の筆記方略の利用 普段の授業場面において筆記方略をどのように利用しているかに

は、「書く内容」と「書く工夫」という2つの側面で日中高校生に違いがみられることが明らかになった。日本では、教師が板書した内容を写していることが多いため情報量が多く、生徒自身が工夫する余地は小さかった。一方、中国では、授業中に教師の板書を全て写すことはないため、情報量は少なく、書き残す情報を取捨選択していることが多いことが示された。さらに、日中のいずれにおいても、ノートに多くの情報を写すだけに止まっている生徒や、授業中にほとんど筆記活動を行わず、その後の学習で困ってしまう生徒、そして「色づけやデザインばかりを工夫してしまう」といった筆記方略の表面的な工夫にこだわる生徒が存在することも明らかとなった。

授業中筆記方略する理由 なぜ授業中に筆記方略をするのかについて分析したところ、日中ともに「目的」、「有効性の認知」、「環境要因」、「学習習慣」という4つの側面が影響を与えていることが示唆された。特に、「目的」に顕著な違いが見られた。日中ともに授業外の学習のために筆記方略を利用している生徒が多かったが、日本では主に授業中に作成されたノートを復習やテスト勉強などに直接的に活用している(10名中7名)のに対して、中国では授業中のメモを手掛かりに、授業後の改めてノートを作り直していることが多かった(10名中5名)。つまり中国では授業中のメモを、授業後にノートをまとめ直すための準備として行っていることが多かった。この違いが生まれる背景には、どのような学習が有効だと思っているのか、周りの学習者の行動をとっているのか、さらに長年の習慣などが影響を与えている可能性も示唆された。

考 察

以上の結果から、日本と中国の両国では、授業中の筆記方略に違いがみられることが明らかとなった。またその違いの背景には、目的の違いなどが存在していることも明らかとなった。ただし、今回の結果は日中10人ずつという少数のサンプルから得られたデータをもとに分析・解釈したものである。今後、より大規模な調査等を通じて、日中高校生の利用実態やその背景要因をさらに検討する必要があると考えている。